

テダ（太陽）の語源

間宮，厚司

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

71

(開始ページ / Start Page)

2

(終了ページ / End Page)

9

(発行年 / Year)

2005-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00010064>

論文

テダ（太陽）の語源

間 宮 厚 司

はじめに

テダとは「太陽」を意味する沖縄固有の語であり、『おもろさうし』（一五三二—一六三三年）にもすでに「てだ」と表記されている。そこでまず、仲原善忠・外間守善『おもろさうし辞典・総索引（第二版）』（角川書店、一九七八年）の解説から見ておこう。

太陽。按司。王。原義は太陽であるが、後に時の支配者、権力者である按司や王などを讃美し敬称することばとして使われるようになる。てだの語源については諸説があつて定まらない。

外間守善『日本語の世界9—沖縄の言葉—』（中央公論社、

一九八一年）所収の「太陽を意味する沖縄古語」は、その冒頭でヒ（目）とテダ（太陽）の関係について、こう述べる（一九九頁）。

太陽を意味する現代の琉球方言には、フィー（ヒー）とティーダ（ティラ）の二系統がある。そのうちのフィーが本土方言でも使われるお日様の日であることは疑いないが、ティーダの語源については諸説あつて定まらないようである。フィーとティーダとは、音韻論的な対応関係も見出せないのだからまったく別系統の語であると思われる。つまりフィーからティーダに変ったとか、ティーダからフィーに変ったとかいう関係はないといえよう。そうなる¹⁾と、ティーダという語が「日」以外の日本語と関係があるか、あるいは日本語流入以前の基層語の残影か、あるいはまた琉球方言独自に派生させたものかということを考えざ

るを得ない。

また、中本正智『図説琉球語辞典』（金鶏社、一九八一年）の「太陽」の項（二三四頁）には、テダの語源説の変遷に関する簡潔な記述が見える。

太陽を意味する琉球語のティダは、日本語の南方語起源説のさきがけとなった語である。初め「日本人と南洋」（新村出『東方言語史叢考』一九二七年）で指摘された。以後、安藤正次等によって南方語起源説が議論され、現在に至っている。また一方では、「ティダの語源」（亀井孝、昭和三七年）、「琉球方言の太陽を意味する語について」（上村孝二、昭和三八年）において、「天道」の変化形とする漢語起源説が行われてきた。甲乙定め難く現在に至っている。いま一つ、「照る」説（仲原善忠のテリヤ、宮良当壮のテル主）も忘れてはならない。

本稿では、いまだ決定されていないテダ（太陽）の語源について、検討を加える。

一

以下、先行研究的確に、プライオリティーの面も含めて整理している、外間守善『日本語の世界9—沖縄の言葉—』の「テダの語源に関する諸説」（二八一頁）を引用しつつ、テダ

の語源はどの説が最も適切なのか、考えていくことにしたい。

最初に、新村出と安藤正次が提唱した南方語系説から始めよう（『日本語の世界9—沖縄の言葉—』の一八一頁）。

初めてテダの語源について意見を出したのは新村出と思われるが、新村は台湾のアミ語の太陽を意味するチダルが転じてテダになったという考え方である（『日本人と南洋』『東方時論』大正六年）。次に安藤正次は、『古事記』などの古語に結びつけながら南方語にテダの語源を求める考え方で、『古事記』のトダル、チダル（光る、輝く）、台湾アミ語のチダル（太陽）、マレー語のシナル（日光）、ポリネシア語のシナ（月）など同系の語であろうと説く（『登陀流・血垂考』『古典と古語』昭和十年）。新村、安藤の考え方はテダの語源を南方語に関連づけているもので、ひとまず南方語系説とでも名づけておこう。

右のようにテダ（太陽）の語源を、台湾アミ語のチダル（太陽）・マレー語のシナル（日光）・ポリネシア語のシナ（月）などに求めるのは危険である。なぜなら、日本語と同系統であることが確実に証明された他言語が現在まで発見されていないからである。よって、語形と語義が単に類似しているだけで関係づけるのは信憑性に欠けると言わざるを得ない。

それとは別に、『古事記』や『日本書紀』に見られるトダルやチダルをテダ（太陽）と結びつけるのにも問題があると思

う。

- ① ^{やまと}日本は浦安の国、細^{くはしこ}戈^こち^ちだる（千足）国「日本書紀・神武」
- ② 天^{あま}つ神^{かみ}の御子^{みこ}の天津日繼^{あまつひつぎ}知らしめすと^とだる（登陀流）天の御巢^{みす}なして「古事記・上」

現行の古語辞典で調べると、①のチダルは「十分に満ち足りる」意で、語源は丸括弧の中に示した原文と同じ「千足」。②のトダルは未詳語としつつ、「十分に満ち足りる」意か、とするものが多い。『時代別国語大辞典・上代編』を見ると、トダルの【考】の最後に次の記述が見える。

「八十種と曾^{ソレ}太^ナれる」（仏足石歌）のソダルが十^ツ足^ツルだとすると、十^ト足^ツル、千^ナ足^ツルも考えられる。

ここから、チダルは「千足」、トダルは「十足」と解するのが穏当であろう。そうすると、チダルとトダルは「光る・輝く」の意でなくなるから、テダ（太陽）と関連づけることはできなくなり、この点からも南方語系説は破綻を来す。

二

次に、「照ら」からの転訛説を検討する（『日本語の世界9—沖繩の言葉—』の一八一頁—一八二頁）。

南方語系説に対して、「照ら」からの転訛説は、いつ頃、誰が言い始めたものかははっきりしないが、仲原善忠はその著『おもろ新釈』（昭和三十二年）に「テダの語源は明らかでない。テリヤ（即ち照るもの）からテラになり、ラ行ダ行の混同からテダにかわつたと説かれる」と記している。仲原が生前私に語っていたところによれば、テリヤ→テラ→テダという転訛を考えた人は柳田国男であったとのことであるが、柳田の論文にそのことを文字化したものはいまだにみつけない。たぶん口述でもあったのではないだろうか。新村の前出論文再掲（『東方言語史叢考』昭和二年）の補注によれば、「琉球語のテダ（日）の如きも、やはりテラ（照）の転音と見るべきの説、琉球語学者間に有力となれり」とあり、その当時には、「照ら」からの転訛説が新村説に対する別な考え方として出されていたことがわかる。琉球語学者というのが誰をさしているのか明らかでないが、当時の人といえば伊波普猷や宮良当壮らをさすのであろう。仲宗根政善によれば、宮良は「天道」からの転訛説を考えていたようである（『東西南北』「IDE」八十八号、昭和四十四年）。しかし、宮良の『八重山語彙』（昭和五年）には、「ティダ」に「照る神の義か」、「ティダン・ガナシイ」に「照神加那志」と注されていて、テダの語源を「照る」に結びつけていたらしいことがうかがえる。あるいはその後になって「天道」からの転訛を考えたのかどうか、不明である。

それでは、このテラ（照）がテダ（太陽）に転訛したとする説が成り立つかどうかを確かめたい。

第一に、テラが名詞形になり得るのか、という点を検討したい。通常、動詞の連用形が名詞（例えば、遊ぶ↓遊び、学ぶ↓学び）になるのが普通であるが、四段動詞の未然形が名詞になっていると考えられる語も少数だが存在する。例を示そう。

ツク（築「土などを盛って突き固める」）↓ツカ（塚「人為的に土などを小高く盛った所」）

ナフ（綯「細長い糸状のものをより合わせる」）↓ナハ（縄「紐や藁などをより合わせたもの」）

ハル（墾「新しく土地を切り開く」）↓ハラ（原「広々とした平地」）

ホル（掘「地面や岩などに穴をあける」）↓ホラ（洞「中が空ろな深い穴」）

これらは四段動詞の未然形が、そのまま名詞化したものと考えられている。そこから、四段動詞テル（照）の未然形テラを名詞に想定してもよいのかというと、そう考えるのに躊躇されることがある。それは右に列挙したツク（築）・ナフ（綯）・ハル（墾）・ホル（掘）はすべて他動詞なのに、テル（照）の場合には自動詞だからである。用例数が十分でないから断言することはできないものの、この点は軽視できない。

さらに、沖縄で祭司をつかさどる女性をノロ（神女）と呼び、

『おもろさうし』にも例があるが、ノロは四段動詞ノル（宣）の未然形ノラが母音交替したノロが名詞化したものである。その根拠として、ノル（告・宣）に反復・継続の意を表す接尾語フが付くとノロフ（呪）になるが、接尾語フは四段動詞の未然形に接するので、ノロフのノロという語形は未然形相当と認められ、これは沖縄のノロ（神女）と関連するに相違ない。そして、そのノル（宣）も他動詞である。

したがって、四段自動詞テル（照）からテラ（太陽）が派生する図式を想定するのは、四段自動詞の未然形が名詞化した例が見出せない以上、成立しづらいと判断しておくのが無難である。

第二に、他動詞テル（照）↓テラの名詞化を仮に認めたとしても、次なる段階のテラ↓テダ（太陽）という、 $r \downarrow d$ の子音変化は大丈夫であろうか。そこで、中本正智『琉球方言音韻の研究』（法政大学出版局、一九七六年）を参考にして、 $r \downarrow d$ と $d \downarrow r$ のどちらが多いのか確かめてみると、次のように $d \downarrow r$ のほうが複数の地域で、しかも語例も豊富に存することがわかる。

$r \downarrow d$ の例↳沖縄名護の「下りる」の ri が di に変化（四〇二頁）。

$d \downarrow r$ の例↳糸満方言（二九六頁）・久高方言（三〇一頁）・辺戸名方言（三〇六頁）に多数の語例あり。

右の $d \downarrow r$ の現象が見られる三つの方言には、ここで問題に

しているテダ(太陽)がテラに変化した語として挙げられている。テダの原形がテラ(照)だとすると、テラ→テダ→テラというプロセスを経たことになるが、そういう変化は考えにくいのではないか。

それでは、『おもろさうし』ではどうか。ダ行とラ行の双方で書かれた語は、大和古語の係助詞ゾに相当する語を「ど」「ろ」で表記した例のみであるが、これについては拙論『「おもろさうし」の係り結びについて』(『沖繩文化』六一号、一九八三年九月)で論じたように「ど」が先と考えて差し支えないので、d→rの例と認められる。

大和古語に目を転じると、よく知られた歌語と通常語の対立例にタヅとツル(鶴)、カハヅとカヘル(蛙)がある。一般論として、歌語が通常語より古いと言われる。ならば、タヅからツル、カハヅからカヘルへと転じたことになり、これはd→rの例に加えられるそうだ。

ちなみに、大阪で「角のうどん屋」をカロノウオンヤというが、これもd→rへの変化である。より徹底的に調査しなければ確言することはできないが、d→rの変化のほうが起こりやすく、r→dの例は数が少ないのではないか。

結局、テラ→テダ(太陽)の音変化を完全に否定するところまではいかないが、その可能性は小さそうだ。

なお、テリヤ(照るもの)→テラ→テダという転訛説もある。しかし、こうした音変化の類例を見出せないのと、そもそもヤが何であるのかが説明できない。例えば、「照れ屋」などのヤ(屋)は人を呼ぶ接尾語だから、テリヤ(照るもの)のヤとは

異なる。(動詞連用形十ヤ)からできた他の名詞の例も見当たらない。要するに、このヤの根本的な問題を解決しない限り、テリヤ説は信憑性に欠けると言わざるを得ない。

以上から、「照ら」および「照りや」からの転訛説には、いくつかクリアしなければならぬ問題点のあることが判明した。

三

最後に、「天道」の音変化と見なす漢語起源説を検討する(『日本語の世界9—沖繩の言葉』の一八二頁—一八三頁)。

「天道」からの転訛を考えて論文化された最初のもののは亀井孝による「ティダの語源」(『山田孝雄追憶・史学語学論集』昭和三十七年)である。亀井は、ティダを日本本土から古くに流入したものであり、その語源は、漢字で「天道」と書かれるかたちにひきあてられるものであろう、としている。

亀井について「天道」からの転訛を考えた論文に、上村孝二の「琉球方言の太陽を意味する語について」(『鹿児島大学文学部文科報告』第十二号、昭和三十八年)がある。上村は、音韻的にも意味論的にも漢語系国語の「天道」を起源にしてティダという語が生まれたのであるということ、文献例はもちろんのこと、琉球諸方言の例を豊富に引用しながら論を進めている。

テダ（太陽）の語源

亀井孝『日本語系統論のみち』（吉川弘文館、一九七三年）所収「ティダの語源」（二二六頁―二二七頁）の中に、興味深い記述があるので引用しよう。

（Ⅲ）オヒサマ——。太陽に対する愛称のかたちといったらよいであらう。しかし、わたくしにとつて、これよりもっとしたしみのふかい感じのするのは、つきにあげるオテント（一）サマである。

（Ⅳ）オテント（一）サマ——。Ⅲと、このⅣとのあひだに感じられる気分がちがひは、類似の例をあげていへば、創作童謡とふるい子守唄とのあひだに感じられる、ある気分がちがひに似てゐる。

すなわち、大和では太陽を表す言い方として、〈御十日十様〉と〈御十天道十様〉の二種があつて、「日」と「天道」の両語はバラレルな関係にあるということである。本稿の冒頭で、「太陽を意味する現代の琉球方言には、フィー（ヒー）とティーダ（ティーラ）の二系統がある」と記したが、〈御十日十様〉と〈御十天道十様〉から、テダの語源を「天道」に求めるのは自然であり、無理がない。

また、『沖縄語辞典』（国立国語研究所、一九六三年）に太陽の敬称として「*ritida*」が見出し語にあるが、これは「おテダ（御太陽）」であるから、「おてんとうさま」の「おてんとう」の部分と対応している。

さらに、『日本国語大辞典（第二版）』（小学館）の「てんど

う」の項の「方言太陽・お日様」を見ると、「ていだん→沖縄県与那国島」「ていだんがなし（がなし）」は尊敬の意を表わす接尾語）→沖縄県石垣島」があつて、天道説にとつてプラスになる方言語形が見られるので、補足しておきたい。

ところで天道説で一つ気になるのは、テンタウ（天道）とテダ（太陽）を結びつける場合、清濁が食い違つていゝのではないか、という疑問である。この点について、亀井孝「ティダの語源」（二三八頁―二三九頁）は次のように述べる。

いまや、この二者、すなはち、《ティダ》と《天道》とのできるだけ厳密なひきあてがころみられなければならない。そのためには、《漢字で「天道」と書かれるところの語のその音韻の面におけるかたち》を、このかたちそのもののために、つきとめなければならない。しかるに、資料の關係で、室町時代にまでさかのぼると、それが《テンタウ》であつたか、《テンダウ》であつたか、不明である。「天道」の用例はきはめて多いけれども、「道」に声点をほどこした例を知らない。かかるかぎり、漢字だけで書いてあつては、はじめから問題にならない。また、かりにカナづけがあつても、ふるい文献では、清濁がおほむね、分明でない。ただし、節用集の類のかなづけをはじめ、相当に清濁を書きわけた江戸初期の資料の例についてみるも、いづれも「テンタウ」「天たう」「てんたう」とあつて、はっきり《テンダウ》とみとめうべき例は得がたい。これは期待されるところである。こんにちの《オテント（一）サマ》

は、『テンダウ』のかたちにさかのほるより『テンタウ』のかたちにさかのほるのが自然だからである。しかしまた、これは、すぐにティダを『天道』にひきあてることに対して、多少ともためらひを感じしめる。けだし、ティダが、その語源のひきあてにおいて、このかたちのためにあひてとして期待するところは、むしろ、『テンダウ』のかたちである。この点において、ティダと『テンタウ』とは、いはばエレガントな対応をしめさないわけである。

亀井は「天道」がテンタウかテンダウか、その清濁を文献資料で追求し、テダとの厳密な対応を論証しようと試みているが、一七世紀初頭の『日葡辞書』には「天道」がテンダウと濁音で記載されているし、テンタウからテダへの音変化のプロセスを、tentau → tenta → tenda → teda と跡づければ、その可能はテ／＼のnがあるのだから大きいだろう。ここで、『おもろさうし』に例のある漢語セド（船頭）に注目したい。『おもろさうし辞典・総索引（第二版）』は、こう解説している。

せと（船頭） 船の責任者。原義は船頭であるが、首里王国の官僚機構の中で職制化された職名としては、勢頭の字を当て、頭役の意に使われている。王国時代の沖縄では格式の高い職掌である。「せんとう」に同じ。

『おもろさうし』には「せと」表記（一三例）以外に、「せんとう」表記（二例）も見られる。これは大和のセンドウ（船頭）

がセドまで変化した、その最初と最後の語形が『おもろさうし』に記録されたものであろう。このセンドウ（船頭）からセドへの縮約を踏まえれば、四音節のテンタウ（天道）が二音節のテダになることは十分あり得る変化であると言えよう。

テダの語源を「天道」に求めるのは漢語起源説であるが、『おもろさうし』に見られる漢語はどのくらいあるのだろうか。高橋俊三『おもろさうしの国語学的研究』（武蔵野書院、一九九一年）の四〇頁に漢語が羅列されているので、そのまま引用してみる。

「かくご（格護）」「かほう（果報）」「げす（下司）」「け・けい（気）」「くねんば（九年母：蜜柑の一種）」「こんげん（権現）」「ざしき（座敷）」「さに（算）」「えんかくじ（円覚寺）」「しよ（主）」「すぢや（衆生）」「するぎ（シユロ木）」「せ・せい（精）」「ぜに（銭）」「せん（千）」「せんどう・せど（船頭）」「だい（代）」「たう（唐）」「たきや（大海）」「ちい（地）」「ちてに（地天）」「ちやうす（上手）」「てく（梯梧）」「てに（天）」「てにち（天地）」「との（殿）」「なばん（南蛮）」「なむぢや（南鐙：銀のこと）」「のさ（能作：芸事）」「はちら（八郎）」「はつ（初）」「ひやくさ（百歳）」「ひやし（拍子）」「ほうさ（菩薩）」「ほとけ（仏）」「まん（万）」「みぢや（御駄：馬）」「みやうぶ（屏風）」「みしやく（御杓）」「やに（様に）」のような漢語（和製漢語も含む）が入っている。これらはほとんどすべて本土経由の語である。

右のうち、「かくご（格護）」は『おもしろさうし』に例が見当たらない（琉歌や組踊には例がある）。また、「との（殿）」はつ（初）「ほとけ（仏）」は漢語ではないから除く必要があるし、「精」字を当てている「せ・せい（精）」は本当に漢語と見なししてよいのかなど、再考を要する語もある。だが、『おもしろさうし』に漢語が結構使用されていることは明らかだ。よって、漢語起源のテダ（天道）があってもおかしくない。

以上、検討を加えた結果、天道説は他説と比べてみて、最も無理がないとの結論に達した。

おわりに

ここで論じた内容を最後に整理すると、以下のようにまとめられる。

- (1) テダ（太陽）の語源を外国語に求めるのは日本語と同系と認められた言語がないので、避けるべきである。
- (2) テラ（照）説は、四段動詞の未然形が名詞になるのは他動詞に偏っているなか、「照る」は四段自動詞なので、それに背反する。また、dとrの交替現象はd↓rが多く、r↓dは例が少ない。よって、テラ（照）説が成り立つ蓋然性は低いと判断され、受け入れにくい。
- (3) 「天道」が「太陽」の意になるのは、〈御+日+様〉と〈御+天道+様〉の関係から理解できる。テンタウ（天道）

↓テダの音変化については、『おもしろさうし』にセンドウ（船頭）をセドと書いた例があり、それを考慮すれば納得がいく。テダの語源は、天道説の可能性が最も大きいとの結論に至った。

（まみや あつし・文学部教授）